

ことばを学ぶ メカニズム

認知科学からのアプローチ

今井むつみ
Imai Mutsumi

第9回

英語母語話者の言語感覚

前回 evidence という単語が可算・不可算両方の性格を持つ単語なのかという問題を、コーパスを使って考えた。1800年代から現代までの大量の用法をコーパスで分析すると、evidence は可算・不可算の両方の使い方がある単語というよりは、不可算名詞と考えたほうがよいという結論が得られた。

evidence のような抽象語ではなく、wine, water, coffee のような日常語で、明らかに不可算名詞とされている単語も、可算名詞として使われることがある。この場合、たいていは話者が特別な意味にするために通常の可算、不可算の使い方を逸脱した使い方をわざわざする。そこを体得して母語話者と同じように文脈に応じて効果的に逸脱が使えたら英語（超）上級者である。ただ、ここを外すと、単なる文法間違いになる。

今回も辞書とコーパスを使いながら英語母語話者の可算・不可算の知識に迫ろう。なお、今回も早稲田大学のヴィクトリア・ミュラーライゼン准教授にご協力いただいたことを明記しておきたい。

☛ coffee or coffees?

まず手始めに文の自然さを判断してみたい。

1. I usually have a donut and coffee for breakfast.
2. I usually have donuts and coffee for breakfast.
3. I usually have a donut and a coffee for breakfast.
4. I usually have donut and coffee for breakfast.

5. I usually have egg and coffees for breakfast.

英語母語話者が不自然と判断するのは、3, 4, 5 である。donut, egg は可算名詞、coffee は不可算名詞である。しかし3は coffee が可算名詞として使われている。4では donut が不可算名詞になっている。5では egg が不可算名詞、coffee が可算名詞として使われている。

6. We ordered two coffees and two sandwiches to take out.

7. These egg-and-cheese sandwiches don't have much egg in them.

しかし上の6, 7は母語話者は自然だと判断する。なぜだろうか？

今度は beer, wine, chocolate について考えてみよう。これらの名詞も不可算名詞だ。しかし Corpus of Contemporary American English (COCA) というコーパスで検索すると次のような用例が出てくる。しかも、これらは限定的な用例ではなく、同じパターンの例がたくさん見つかる。

8. So I had two beers, which helped me get to sleep...

9. She ate one chocolate after another.

10. Patrick, there's enough money in there for two milks.

8-10はなぜ OK なのだろうか？ 特に、OALD (*Oxford Advanced Learner's Dictionary*) では milk が可算で使えることにはまったく触れていないのに、なぜ英語母語話者は10も OK と判断するのだろうか？

11. It is also good with grilled pork tenderloin or on salty cheeses such as gorgonzola or Pecorino.

12. Seven wines are made under this label, each in collaboration with a winemaking legend from somewhere else in the world. チーズ、ワインも不可算名詞だが、11, 12は母語話者は自然と判断する。しかし、13, 14は不自然と判断される。

13. You are too young to drink wines.

14. I have coffees every morning for breakfast.

なぜなのか。まず考えてみてほしい。

☛ 可算／不可算を使い分ける英語の「肌感覚」

8-10は店で買うときの単位として可算名詞の扱いをされる。私たちがレストランで「コーヒー3つ」と注文するがその感覚だ。実際、レストランで注文するときは「コーヒー3杯」というより「3つ」と言う方が自然だ。しかし、家で飲むときは「私は起きるとコーヒーを2つゆっくり飲む」というのはとても不自然だ。ミルクも、店で2カートン買うとか、喫茶店などで2つ注文するということが明らかなきにのみ、可算の使い方は自然に聞こえる。

チョコレートは、板チョコのかけらのときには可算名詞は使えない。トリュフのように、個別にひとつひとつの形が決まっていて、それをつまんで食べるときだけ可算でも自然に聞こえる。ケーキもそうで、カップケーキのように小さいものは可算として使っても自然だが、日本のケーキ屋さんでよく見かける大きなケーキを切り分けて売っているものは、a piece of cake というのが自然である。

13, 14は売られる・配られる単位ではなく、「種類」を指す。13では2つの種類のチーズのことを、14では違うワインの種類のことを言っている。この場合は、単数で使われることはなく、必ず複数形になる。

8と14を比べてみると、ビールは単位で、ワインは種類のことを指して複数形になっている。実際 COCA コーパスで調べると、beers の50の用例をランダムにとってくると、そのうち34は単位

(瓶)の用法だった。対して、50の wines の用例はすべて種類の意味だった。アメリカではビールは普通はビンや缶で売られ、その単位を人と分けずにそのまま1人で飲むことが前提になっているからだ。ワインは、ボトルをグラスにそそぎ、人と分けるのが前提なので、私たちがグラスワインを2杯注文するときに「ワイン2つ」という言い方はあまりしない。レストランでも two glasses of wine と言うのが普通で、ワインを可算用法で使う時はほとんどが違う種類のことを意味する。

このように不可算のものを可算に使う時には、文脈がその文化の中で明らかで、前提が共有されている必要がある。

ここから13, 14がなぜ変なのかあらためて考えてみてほしい。13では「若い人たち」はそもそものような種類のワインを飲むこともよくないことであるという含意がある。つまり「複数の種類のワイン」という特別な意味でワインを使う必要性はここではまったくない。14も、毎朝飲むコーヒーはたぶん家で飲むだろうし、そのときにわざわざ特別に注文の単位を含意する可算用法を使うのは不自然なのである。

つまり、通常の文法カテゴリーを逸脱するときには、それを許容する特別な状況が必要だということだ。また、文法カテゴリーを逸脱した使い方は、そうしなければ文法的に正しくない、ということではない。今でも多くの人々は6を“two cups of coffee,” 8を“two bottles of beer,” 12を“seven types of wine”とすることを好むことは覚えておくべきだろう。

このような通常の使い方からの逸脱を文脈を外さず効果的にできたら少なくとも可算、不可算文法について、表層的にテキストに書いてある可算、不可算の定義を超えて、英語の理屈の感覚的理解に近づいたことを意味する。ただ、こういう規則をルールとして教えてもなかなか定着しないことは覚えておくべきだ。折に触れて wine, coffee, beer, egg, potato, appleなどを辞書とコーパスで調べ、もともとの可算、不可算のカテゴリーから逸脱している用法を集めて、その理屈を学習者が自分で発見するような機会を設けると、次第に母語話者の肌感覚にちかい理解になっていくのではないと思う。(慶應義塾大学教授)